

# 林 檎 停 通 信

No.158 2016. 10. 25

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村 3402-4

町田 登・幸子

先月、ナチュラルハーモニー主催の「自然栽培全国普及会中部ブロック大会 2016」が安曇野市であった。私はその組織の存在さえよく知らなかったが、新規就農者が多数参加されるということを知ったので、少しでもお役に立てればと思い、りんごの話をして下さいというその依頼に協力した。皆さんの前で話した内容の骨子を書いてみます。

新天地を求めて安曇野へという紹介案内がありますが、私はそんなロマンを秘めた新規就農者ではありません。生まれは志賀高原のある山ノ内町です。祖父の代からのりんご農家の長男です。そのりんごですが、当時はスターキングやゴールデンデリシャスが栽培の主力でしたがその後ふじに変えられるときでした。一方流通の形といえば青果物を県外に移出するには格付けという証明がなければそれができないという時代でした。そんなときに友人と産直運動を始めたのです。当時の世相ですが、「不知海」があり、有吉佐和子さんの「複合汚染」、綿貫礼子さんの「子宮に指を置いてきた」、福岡正信さんの「わら一本の革命」等の本も出版されており、農薬や化学物質に対する警鐘が響きわたっていたときでした。きわめつきは我が町の地獄谷温泉にある野猿公園の奇形猿でした。その原因は猿に与えている輸入大豆かりんごではないかという地方新聞の記事でした。りんごには熟す前に落果するという現象のある品種があり、それを防ぐために落果防止剤という薬剤が使用されていました。その成分はベトナムでアメリカ軍が使用した枯葉剤に等しいものです。その結論はともかく、自分たちをとりまくあらゆる環境を考えていかなければと、まずできることは必要以上に農薬を使用しないという思いでした。

私は20アールのりんご園に2年間全く農薬を使用しないで栽培してみた。結果は惨々たるものでした。連帯を求めて孤立を恐れずなどと息巻いていた自分は家の中で孤立してしまい、居る場所がなくなってしまった。当然のことながら人様の培った財をつぶすことはできない。でも自分の表現はしたい。それが此処安曇野でした。

塀のない底からの夢の始まりでした。3年かかって舞台を求めた。共同幻想に巻き込まれないように人里はなれた山林原野とした。開墾し枕木を積んだ小屋を建て、水を引き電気を引き、北の国からの吾郎さんのようでした。(笑い)

りんごを栽培するにはまずりんごの歴史を知りましょう。原種は北半球に広く分布していますが、その原産地はトルコ周辺ようです。紀元前のアレキサンダー大王の頃にローマ帝国が持ち帰り、そこからイギリスに入った。戦争と侵略ですよね。そしてメイフラワー号でアメリカに渡った。1871年に北海道に苗木が導入されそれが日本中に伝播された。一方原種としては平安時代の末期に中国から渡ってきたものが最初ようです。ピンポン玉くらいになるかどうかの大きさです。これは倭りんごといって西洋りんごと区別されてきました。農薬など無かった時代から生き続けている野生種はすごいですね。

さて、私たちの此処での小史も30年以上になりますが、試行錯誤をくり返し辿り着いたのが原種に近い病気に強い品種を選択するしかないという結論です。グラニースミスです。見て下さい。ふじの葉がこんなに落ちてしまっているのにグラニーはどうでしょう。それからイギリスの古い品種も10種

ほどありますが、やはり葉が落ちていません。これなら高温多湿の日本の気象でも対応できるのです。ただ、これらはみんなすっぱいものばかりです。ジュースや料理に使用すればほんとうに美味しいのですが、それだけではつまらないとジョナサンのように種播く人に私はなった。(笑い) 10年にしてそれらがようやく実を着けた。形や色はグラニースミスに似たものが多いが全くちがうものもある。おもしろいですよね。楽しいですよとばかり言っているとカミさんに叱られますが。(笑い)

と、こんな内容で30分ばかり話をさせていただきました。りんご園では剪定の方法を鋏を使ってりっぱな講師さんが実施してくれた。小雨の中でも50名以上の参加者がとても熱心に見つめていた。集会に参加した皆さん、誤解しないようにして下さい。植物ホルモンがどう動こうとその剪定方法によって病気や虫は根絶できませんよ。問題は空気なのです。それから無農薬栽培だから高く売れるという思惑もだめです。これもりんご小史にあります。国光紅玉に変わってスターキングが登場したときに売れゆきが悪かったので、銀座の青果屋さんが何倍かの値をつけたらバカバカ売れたそうです。そんな、馬鹿な人たちを相手にするのではなく、ひとつの社会運動としての歩みを続けて欲しいものです。「もしも地球がひとつのりんごだったら」(デビッドスミス文・スティーブアダムス絵)という絵本をみた(読んだ)。その冒頭を引用します。「まず、りんごの4分の3を取り除きます。さらにその半分は人間が住めず、作物も育たない土地です。そののこり、つまり8分の1が人間がくらせる土地になります。つぎに、その8分の1のりんごをさらに4つに切り分けます。そのうちの3つは、農地に適さない土地です。岩がごろごろしていたり、湿地だったり、寒すぎたり、傾斜がきびしすぎたり、土壌が薄すぎて農地にはむかないのです。また、かつては農地だったのに、都市化が進んで、道路や建物が建ってしまった土地もふくまれています。それらを除外した32分の1のりんごの表面が、わたしたちの食べ物を生みだしています。その小さな部分で地球に住む人間すべての食べ物を生産しているのです。」

もしも世界がスケールダウンされていて大きな世界がとても解りやすく説明されています。りんごの32分の1の一片のそのまた一片で私たちはりんごを栽培しているということになりますが、世界観の乏しい私なんぞはこの本をみていると果てしない宇宙に呆然としてしまいます。

広い世界の現実に戻ろう。TPP・植物防疫法などの行く末によって農薬の使われ方が当然変わってくる。このままゆくと農薬の使用量が増えることは確かだ。現象だけをみる世界が広がるからだ。私の舞台もいよいよエピソードに近くなった。自分の思いが完結するとは思えないがささやかなるりんご人生をもう少し歩もうと考える。「れら」に続いてのアイヌ語を使用した次の品種の名を、遠い過去の彼等の生活に思いを馳せて。

裏山も赤や黄色に染まり始めた。雨や曇りがちだった日々が久しぶりの晴天となり、りんご園にアキアカネの群れが飛びかう。やっぱりんごも青空に似合う。小さな生命の虫たちもいてあたりまえの世界を願うばかりである。

いよいよ薪ストーブのお世話にならねばと煙突の掃除を隣の息子たちが始めた。爺さんもやせがまんはよしてとりかかろう。炎を前にしての安いウイスキーも美味ですよ。皆さんのお来しをお待ちしております。

町田さんのりんご  
入荷中しています！



町田さん  
No.4388 16-164 11/4